

夜を漕ぐ

受賞作品概要

葉山ほずみ

繰り返す。

さつき病院で見た弟の腸と比べながら。

ホルモンを焼きもせず、素手で掴み、広げては取り皿に置いてある姿は普通の焼肉店に食事にくる客とは違うからか、店員は戸惑っているようだった。

「じゃあ、こっちの取り皿の上の分だけお願いしてもいいですか」

ジュツと食欲をそそる音をたて、網の上でホルモンはクルリと丸まった。腸壁に付いている脂肪が炙られ、溶けるたびに火が立ち上り、脂の焼けるにおいがした。

「ハラボジが厨房からお客さんのこと見て、焼かずに広げてるからちよつと気にしてるみたいで……」

焼肉屋に来て、肉を食べずにホルモンだけを注文するのも珍しい客なのだろう。しかも、その客がそれを素手で掴んで一枚、一枚広げていたら怪しいのを通り越して気持ち悪い部類に入るはずだ。

孫娘は美咲の方を見て少しだけ困った顔を隠せず、口もとだけで笑ってみせた。

その焼肉屋は、健太が手術した病院から最寄り駅まで歩くあいだにあった。

とにかく、健太以外の腸が見たかったのだ。それがたとえ、牛のものだとしてもかまわない。コマ切れになっていてもかまわない。弟以外の腸を見て確認したいことがあった。

新鮮なホルモン——さつき見た弟のホルモンの方が絶対に新しいはず——そんなことを思いながら店に入った。

店の中に客はいなかった。弟の手術は朝の十時から十時間かかった。そのあと、後処置やら術後の説明やらで一時間、さらに意識が回復するまで一時間ほど看護師にいわれるまま待つていたから、結局プラス二時間。弟が手術室に入ってから時計の針がぐるりと一周してやつと、息

のつまる家族待合室から解放された。

ビールがジョッキの三分の一ほどになったころ、ホルモンが皿に盛られてテーブルにやつて来た。

タレに絡んだ白く柔らかそうな物体は天井にあるライトがあたり、キラキラと表面を輝かせている。美咲は一枚、ホルモンを素手で取り、両手の指で端を持って広げた。

カーテンのような髪を伸ばす。ツルツルの表面と白い脂肪の玉が付いている面がある。ぬるぬるして滑るので、しっかりと爪を立て、さらに左右に引つ張る。そのまま天井へ持ち上げ、ライトに透

かす。透かし終えたホルモンは目の前の取り皿の上にべちよつと置いた。それを

美咲は箸を取り、焼き上がったホルモンを口に運ぶ。

口のなかにホルモンに絡んでいたタレのニンニクの香りが広がり、数回咀嚼すると、脂の甘味が追いかけるように膨れ上がる。たつた一切れのホルモンがどんどん大きくなり、口のなかを占領していく。噛めば噛むほど、それは酷くなり、口を閉じていてもあふれ出てしまいそうだった。飲みこみ方さえ思い出せない。いったい、どうやったらこの物体は口のなかから体のなかへ沈んでいつてくれるのだろうか。

術後、執刀医は弟から切り取られた腸を前に置き説明をした。

説明を聞き終え、廊下を歩き始めるとさつきまでいた部屋から、ボトツ、と音がする。

それはなにか重たいものが空のゴミ箱に捨てられたときの音に似ていた。

ホルモンを食べ始めた美咲を見て安心したのか、焼肉屋の孫娘は厨房へと戻っ

体で顔の側面を濡らしていた。

美咲は健太の名前を叫びながら体を床から抱き起こした。健太の方が骨だつて太いし身長だつて高いのに、引つ張り上げた重みはあつてなく美咲の手のなかへ入った。

母子家庭で三人家族だから、救急車には母が乗り込み、美咲は病院名を聞いてあとから車で追いかけることにした。

朝になつても健太の意識は戻らなかつた。美咲はベッドの横のパイプ椅子に座り、点滴が繋がれていない方の腕を摩つた。健太の体は干からびた枯れ木のように見えた。

やつと目覚めた健太は、「なんで病院になんて運ぶ？ あのまま気持ちよく意識がなくなつてやつと死ねるって思つたのに」と恨みがましそうに美咲を見上げて手を振り払つた。

「あの子は死にたがつていたんです。勝手に助けたわたしのことを未だに許してないと思いますよ」

そう声を出してしまえば、本当にそれが真実なのだろうかという疑問が心のな

ていつた。入れ替わるようにハラボジと呼ばれていた男が出てきた。

「……自分、焼酎飲めるか？」
テーブルの横に立ったハラボジは短い白髪の頭髪をした七十過ぎぐらいの男だった。

「病院からの帰りか？」
ハラボジは大学病院がある方向角にあごを動かす。

一見で入った店の亭主に話す内容でもない。だけど、美咲のなかには遅い時間に入つてきた上にホルモンだけを注文して、それを焼かずに素手で掴んでいたという負い目があつた。

「弟の腸を見たんですよ。手術で切り取つたやつなんですけど」

美咲がそう言うと、ハラボジは変な声を上上げてグラスに入っている焼酎を一気に飲み干した。

「色もこんな感じですよ。白くて……」
「ああ、もうええつて！」
ハラボジは手早くグラスに焼酎を注いだ。

「しかし、あんた変わつてるなあ。普通、

かに浮かぶ。それでも、美咲の手を振り払つたときの健太の顔を思い出すと、そうに違いないとも思う。

「あんた、傷ついたんやな。辛かつたな」

ハラボジは何気なくその言葉を口に出したのかも知れない。けれど、美咲はとても戸惑つてしまった。

小さいころから風邪をこじらせたり、入院するようなケガや病気をするのはいつも健太の方だった。一度だけ、父の姉という人に会つたことがある。母が離婚する前だから美咲が小学生に上がる前だ。そのときにも健太は真珠腫というものが目に出て、手術するために入院していた。そのときに父の姉は「健太はかわいそうに。たまには美咲が病気になればいいの」と言つていた。

その言葉は子どもだった美咲の体の深い場所へ沈んでいき、今もなお広がりに続けている。

病院に戻り、健太が入院しているフロアへ上がった。

人の腸を見た日に焼肉屋に来るなんてことさえへんのちゃうの」

ハラボジは焼酎に口をつけながら眉根を寄せいている。美咲は理由を話しハラボジに謝つた。

「この世に存在している健太と美咲の体の部品は性別によるもの以外、二つずつある。それが手術によつて小腸と大腸の一部、それから盲腸が無くなった。自分の体のなかに空洞が出来たような気がした。」

「去年の夏、弟が熱中症で入院したんです」

もともとクロン病のために水分と栄養の吸収がうまくいつてなかつたうえに、猛暑が追い打ちをかけた。

健太は一ヶ月ぐらいかけてやせ細つていつた。

「よく双子だつたらなにか感じ合うものがあるでしょとか言われるんですけど、まったくそういうのわたしたちにはなくて」

健太はベッドからフローリングの床に落ち、体じゅうを震わせて、嘔吐した液

夜勤の看護師や研修医がいる詰所の前を通りすぎるとき、健太の執刀医に声をかけられた。

「少しお話しませんか」

執刀医はイスから立ち上がり、詰所から出てきた。

美咲の目の前に立つた執刀医は視線を待合室へと向け、それとは反対の方へ歩き出した。

執刀医と美咲はエレベーターホールの前にあるベンチシートに座つた。

「ずいぶん、飲まれましたか？」

執刀医は面白そうに笑う。思わず距離を開けるようにベンチの端の方へ移動した。

執刀医は少し腰を浮かし、下履きの術着のポケットから折りたたんだ黄色い紙を取り出した。

「これ、あなたのですよね」

美咲は渡された紙片を見て慌ててバッグから財布を取り出す。財布に入れたはずの紙が無くなつていた。

美咲は手渡された紙を握りしめる。

「臓器移植カードでしょうか？ 若いのに

いい心がけだとは思いましたが、一緒に留めているメモ用紙の内容がきになりましてね」

執刀医が動くたびに半袖からタトゥーの文字がちらついて見える。美咲は臓器移植カードの後ろの紙を開いた。

「わたしには双子の弟がいます。弟はクローン病という病気です。もし、このカードを使うころ弟の腸を弟へ一番に提供して欲しい。それ以外の臓器はどんなふうに使われても一切文句は言いません」

「健太さんの人生は病気も含めて健太さんのものです。あなたの人生も同じですよ。誰からも取り上げられるものではないんです」

執刀医はやわらかく笑う。

「先生って変わってますよね。タトゥーが入っている腕をした先生なんて初めてだし」

美咲が執刀医の腕に視線を向けると、

出来る。そう思うだけであなたが救われるのならね。健太さんは病気が進行していくことに希望が持たなくて長生きしたくないと診察のときに言っていました。なのに入院してちゃんと手術も受ける。矛盾してると思いませんか？」

「思います、美咲はそう答える。

「面白い姉弟ですね。お姉ちゃんは自分だけが健康だという罪悪感で脳死になる方法ばかり探しているし、弟は迷惑をかけることを心配してあわよくば死ぬる方法を選ぼうとしている。バカみたいですね、それこそ」

執刀医はそっと立ち上がった。ベンチが少しだけ軋んだ音をたてる。動き出しそうな音がする。美咲は立ち上がった執刀医に慌てて声をかけた。どうしてそうしたのかは自分でもわからない。ただ、今、ここで自分の気持ちを言わなければならない焦りに襲われたのだ。

「わたしはずっと自分のことを弟のため、のスペアだと思ってました。いえ、今でもそう思っています。わたしが双子として生まれたのは健太のための体の部品の

彼は自分の左腕の術着をめくり上げてタトゥーが良く見えるようにした。らせんを描きながら左上腕の中間部分ぐらいから上に向って伸びている。遠くから見たら縄でも巻いているみたいに見えることだろう。

「アラビア語で、『願いは必ず叶う。もし、願いが叶わないときはその願いが間違っているからだ』って書いてあるんです」

「それは先生が考えた言葉ですか？」

執刀医は首を横に振った。

「イエス・キリストの十二使徒のヤコブの言葉ですよ」

執刀医は視線を床に向けた。

「僕がまだアメリカで研修医をしていたときに、二人の患者が運ばれてきました。一人は見ただけでもうだめだとわかる状態でした。もう一人は骨盤骨折の重傷でしたが、命に別状はありません。ただ、この二人は関係者で、危篤の方の女性は被害者で骨盤骨折の男性が加害者でした」

執刀医は少しだけ思い出したように目

替えなんだったって」

執刀医は座ったままの美咲の腕を軽く掴んでベンチから立たせる。

「じゃあ、その部品をしつかりと守って生きていかなければいけないですね」

執刀医はゆつたりとした笑顔を返した。

「お母さんをいたわってくださいね。本人よりも大変な一日だったでしょうから」

美咲は執刀医に促されるまま廊下を歩き、待合室のスライドドアを開けた。待合室には母独りだけがいた。

母は窓のそばにあるテーブルに突っ伏して寝てしまっている。

「この窓から見える景色ってどうだったか思い出せないんです」

美咲はガラス窓の前に立ち、景色に目を凝らした。

窓はカーテンが開けられ、どこまでも続いていくような真つ黒な闇がひろがっている。それは今日一日、母や健太や美咲が漂流していた真つ暗な海のようにも思えた。

「この窓の前は大きな川が流れています。

を細めた。

「男性は自殺しようとしてビルから飛び降り、下をたまたま歩いていた女性の上に落ちたんです。女性には小学生の二人の子供がいました。僕はそのとき思ったんです。男性が死んで女性が助かればいいのにつて」

執刀医はため息をついた。

「そのとき、このヤコブの言葉をふと思ひ出したんです。それで納得がいきました。男性が死ななかつたのは僕の願いが正しくなかつたからだ」と

彼はタトゥーの文字を指先で文字を確かめるように触っていた。

「さっきの臓器移植カードを作ってから何回考えたかわからないんですけど、どうやったら腸を守りながら脳死になれるかって」

美咲が笑うと執刀医も笑った。

「それがあなたのバランスなんですね。いいんじゃないですか、そう付け加える。」

「もし、不幸にもあなたが脳死状態になることがあれば健太さんを助けることが

その面側が河川公園になっていて、あと、あつちに見える小さな明かりが駅ですね」

美咲は執刀医が指さす方へ顔を向ける。駅とその周りにある灯りが、夜の海に浮かぶ小さな灯台みたいだ。

美咲は目を一度閉じて夜の闇を消した。執刀医が背伸びをする。執刀医の腕から見えるタトゥーが鏡のようなガラス窓に映る。

「たぶんね、あなたの脳死移植計画は実現しませんよ。健太さんのあわよくば死ぬるっていうのもね」

ガラス窓に映っている執刀医は目を細めて自分のタトゥーを指差した。